

信濃の古代と屋代遺跡群

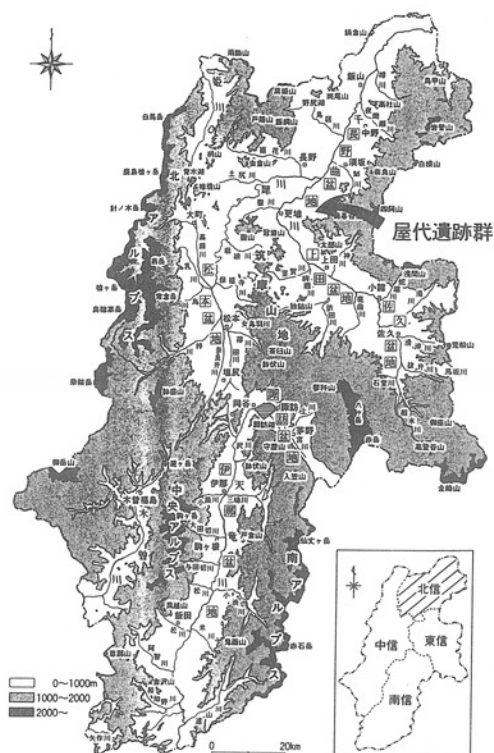
はじめに

屋代遺跡群からは一二六⁽¹⁾点の木簡が発見され、信濃における古代地域社会の実態解明、あるいは中央との関係などを考える上で、貴重な資料を提供することとなった。一方、木簡以外の膨大な考古資料については整理途上であり、なかなか古代・屋代地区の全体像を描けないのが現状である。今回の特別研究集会を機に、木簡以外の考古資料から、屋代遺跡群を中心とした地域の古代社会の把握を試みることにしたい。

屋代木簡の出土状況や出土地点の概要については、すでに第一七回木簡学会研究集会（一九九五年二月）において発表し、『長野県屋代遺跡群出土木簡』（長野県埋蔵文化財センター一九九六）や、『木簡研究』第一八号（寺内一九九六）に掲載した。詳細はそちらを参照していただきたい。今回は、屋代遺跡群や隣接する更埴条里遺跡を含めた地域を対象を広げ、

さらに、弥生時代から平安時代までの流れの中で、木簡が製作・使用・廃棄された当時（特に七世紀後半）の状況を位置づけて行くこととする。

寺内隆夫



第1図 長野県の地形と屋代遺跡群
(1989『長野県史』一部改変)

一 考古資料から見た七世紀後半の信濃

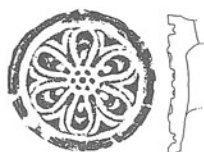
信濃の古代、特に今回のテーマである七世紀後半⁽²⁾の状況を語る考古資料は充分ではない。しかし、近年の開発に伴う調査などによって断片的ではあるものの、資料が蓄積されつつある。ここでは考古資料を生産関連、集落関連、埋葬関連の三つに分け⁽³⁾、信濃全域の状況を概観した上で、屋代遺跡群の位置づけを考えて行きたい。

(1) 生産関連遺跡

県内では、七世紀代の水田や鉄生産遺跡などの調査例はわずかであり、須恵器窯址の調査が中心である。この時期、信濃においても、古代国家の秩序を示す食器様式が導入されはじめたと考えられる。それを支えるための生産体制確立が目指され、各地域で須恵器窯の操業が開始される。

七世紀代に操業が開始され、八・九世紀代に継続、生産が本格化する窯址群では、高井郡の高丘丘陵窯址群⁽⁴⁾（鶴田、中島一九九七）、佐久郡の根岸窯址群⁽⁵⁾（竹原一九九一）などで調査が実施されており、東間郡の芥子望主山窯址群⁽⁶⁾（山田一九九六）をはじめ、他の郡域でも七世紀代に遡る窯址群の存在が予想されている。

屋代遺跡群への須恵器供給を見ると、それまで主体であった陶器や美濃地域からの搬入品が、その影響を受けた在地製品に凌駕され



第2図 雨宮廃寺址出土瓦 (1/8)

てゆく時期にあたる⁽⁴⁾。このことは在地での生産体制確立への過程を示しているよう。

(2) 集落関連遺跡

寺院関係では、豊科町明科廃寺の瓦を焼いた桜坂古窯址の調査が実施され、寺院との関係解明が注目されている⁽⁵⁾。しかし、全般的には寺院・官衙跡など、七世紀後半に中央との関係を端的に示す遺跡の調査は進んでいない。屋代・雨宮遺跡群内の雨宮廃寺出土瓦^(第2図)は、近年、七世紀後半代まで遡る可能性が指摘されており^(坂井一九八八)、信濃国では数少ない白鳳⁽⁶⁾寺院の一つであった可能性がでてきている。

一般的な集落遺跡では、新たな水田・山野開発に関連する集落遺跡が出現する。松本平（東間郡）一帯では、奈良井川左岸の扇状地や田川沿いの河岸段丘上といった未開拓地への集落進出が七・八世紀に開始される^(小平一九九〇、原一九九六)。

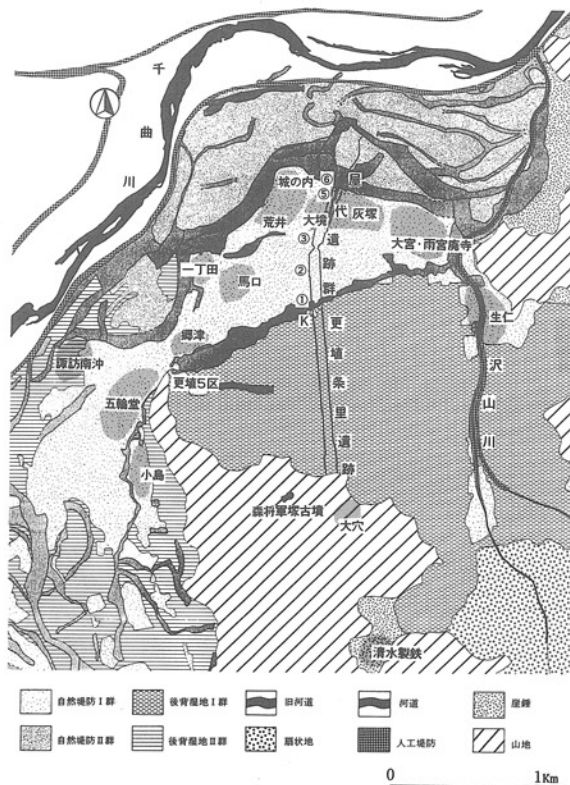
これに対し、伝統的な集落密集地域である屋代地区では、新たな集落の拡大は見られないものの、集落内での大型建物の建築など、質的な変化が認められる。

(3) 埋葬関連遺跡

七・八世紀にかけても古墳の築造が継続している。ただし、六世紀代に前方後円墳が集中的に築かれていた伊那谷地域を含め、信濃全域で七世紀代の前方後円墳は見られず、大形の方墳も見つかって

いない。また、森將軍塚古墳群での新たな古墳築造が七世紀後半で終わるなど、古墳に象徴されていた内容にも変化が見られる（小林一九九六）。

このように七世紀後半の信濃は、古代国家の政策と連動し、さまざまな側面での変革や新規事業が開始された時期にあたる。こうした中、屋代地区はどうであったか、次に見て行きたい。



第3図 屋代遺跡群周辺の地形分類と遺跡群
(1998『弥生・古墳時代編』市川作成、一部改変)

二 屋代遺跡群・更埴条里遺跡の環境

七世紀の問題に入る前に、屋代地区が古代の地域社会にあつた重要な位置を占めることができたのか、その前提としての立地条件を概観しておこう。

(1) 自然環境と水田

この地域において生産・流通の動脈となる千曲川は、善光寺平南部で勾配が緩やかになり流速を弱める。これにより兩岸に自然堤防と後背湿地が形成される。前者は集落の、後者は水田の適地となっている。こうした景観は弥生時代以降、現代まで維持されている。夏高温である点や、屋代遺跡群西端の一重山が千曲川に向かって突出することにより水害が少ない点など、稲作にとって好条件が揃っている。反面、小河川の流入が少なく、少雨地域であることも手伝って、水の確保（灌漑）が重要課題となっている。

(2) 交通の要所

流速を弱めた千曲川は蛇行をはじめ、その湾曲部は「津」や「渡し」の設置に有利に働いたと考えられる。また、美濃方面、関東方面、越後方面からの高速道路が落ち合う現代と同様、古代にあつても交通の要所であつたと考えられる。

「津」などの存在を示す遺構は確認できていないが、千曲川沿いのごく近い地点にまで集落が認められ（第3図）、水運との関係が目される。七世紀代の陸路の遺構についても不明である。

（3）歴史的環境

上記の生産力と交通を基盤として、善光寺平南部地域は弥生時代以降発展を見せる。四世紀代に築造された森將軍塚古墳以後、六世紀初頭にかけて、首長墓と考えられる前方後円墳が周辺の尾根上に散在する。しかし、六世紀には築造の中心は伊那谷に移る。七世紀代には、どの地域にも突出した古墳はなく、新たな段階に入ったと考えられる。

三 水田開発と集落の動向

前節で述べた立地条件のもと、屋代地区は古代信濃の一つの核として歴史を刻んできた。ここでは、生産関連遺跡と集落関連遺跡の変化を捉える中から、七世紀後半の位置づけを試みたい（第4・5図）。

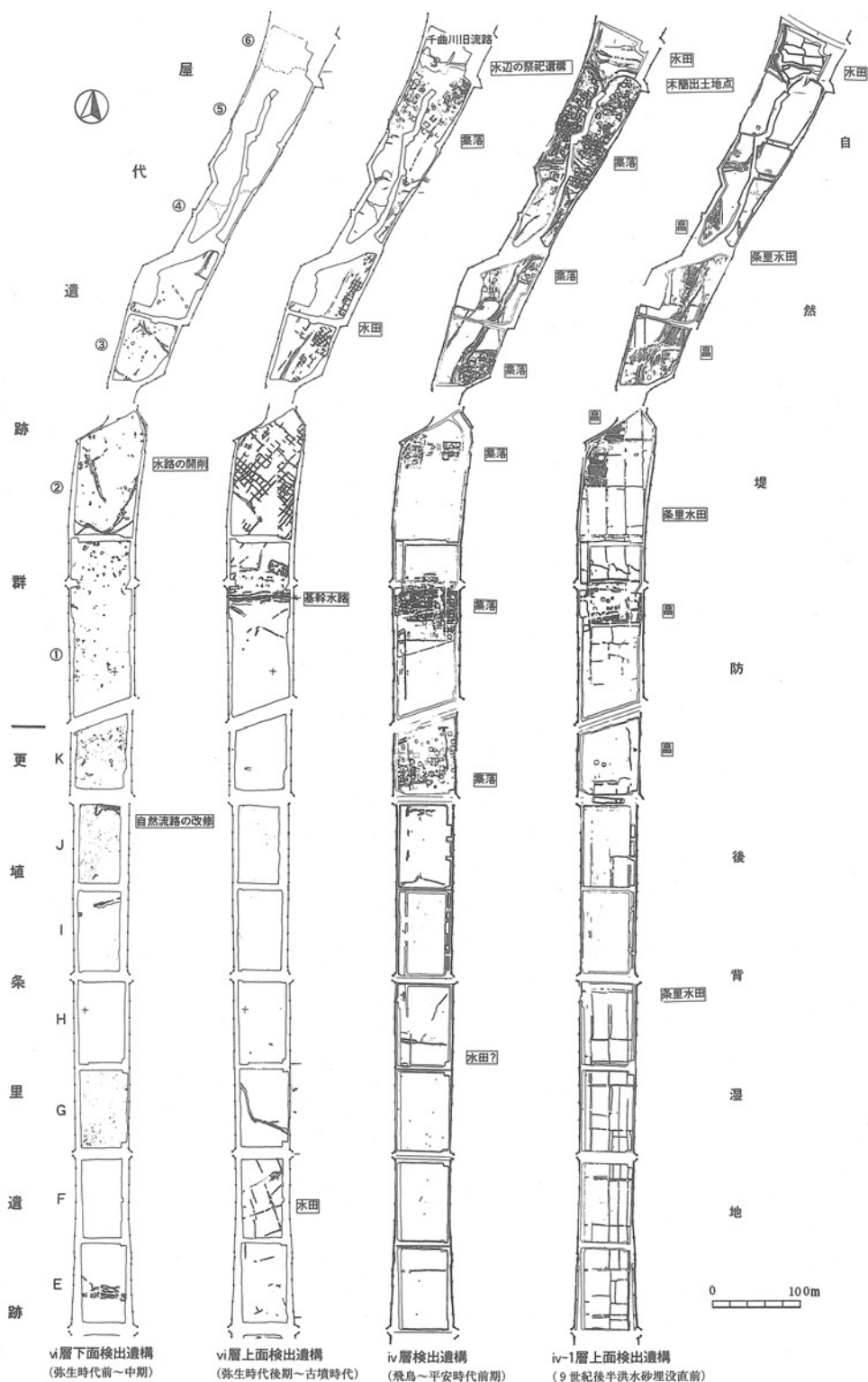
（1）弥生・古墳時代の水田開発

屋代遺跡群・更埴条里遺跡では、弥生時代中期に大規模な水路網が作られ、本格的な水田開発の手が入る。第一の画期である。しかし、弥生時代後期まで維持された水路はごく一部にすぎない。

遺跡名	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	文 献
島										1990更埴市教委
生 仁										1969、1989更埴市教委
大 宮										1984更埴市教委
下条・灰塚										1971更埴市教委
高道遺・屋代④～⑥区										未報告
大 塚										1988、1994、1995更埴市教委
城ノ内										1961、1988、1991更埴市教委
荒 井										1969岡田
松ヶ崎										1990更埴市教委
馬 口										1969、1978、1986～1989更埴市教委
一丁田/新幹線・屋代6・7区										1994、1998県埋文センター
郷津/新幹線・屋代2区										1990更埴市教委、1998県埋文センター
大 塚										1971岡田
高道遺・更埴条里K地区										未報告
高道遺・更埴条里H・I地区										未報告
高道遺・屋代①区										未報告
高道遺・屋代②区										未報告
高道遺・屋代③a区										未報告
高道遺・屋代③b区										未報告
新幹線・更埴条里3・4区										1998県埋文センター
新幹線・更埴条里5区										1998県埋文センター
屋代清水										1994更埴市教委
大 穴										1997県埋文センター
清水製鉄										1997県埋文センター
諏訪南沖										1965更埴市教委
南 沖										1985、1991更埴市教委
五輪堂										1982、1985、1987、1991更埴市教委
小 島										1989更埴市教委

第4図 屋代遺跡群周辺集落の消長

※  は報告書によって住居が確認されたものに限定。 は時期が明確でないもの。時期判断は鳥羽英継による。



第5図 更埴条里遺跡・屋代遺跡群（上信越自動車道関連調査地区）の遺構変遷

古墳時代に入り、四世紀後半頃、再び水路網の整備が開始され、五世紀代頃に完成する。第二の画期である。この水路網は若干の変更にあるものの、現代まで続く水路体系の基礎となっている（長野県埋蔵文化財センター一九九八）。

（2）集落密集地域と古墳群形成

更埴市内では、古墳時代後期の群集墳と集落の分布が千曲川右岸に偏る傾向があり、いくつかのグループを形成している。その一部は、後に「屋代木簡」に記載される「屋代郷」「船山郷」などに対応する可能性がある。この地域は古墳時代、すでに集落の密集地域になっていたと考えられている（森嶋一九九四）。

（3）既存集落内での変動（七世紀後半）

大局的には古墳時代後期以降の集落立地が継続する。屋代・雨宮遺跡群内では、雨宮廃寺（屋代寺）が建立された可能性が指摘されている。また、屋代遺跡群④・⑤区に大型の掘立柱建物群が建てられるなど、当時の最先端に近い建築物が姿を現し、集落景観に変化が見られる。また、屋代遺跡群⑥区で木簡の廃棄がはじまる。

生産関連遺跡については、屋代遺跡群①区などで、水路が埋没、あるいは蛇行する状況が見られ、古墳時代に再開された自然堤防背面側での水田経営は低調であったと考えられる。一方、千曲川の旧流路内（屋代遺跡群⑥区）が水田に造成されはじめる。この時期、水田開発の主力は自然堤防背面よりも旧流路へ注がれていた可能性

が高い。第三の画期としておく。

（4）条里型地割りの施工開始と旧水田域への集落進出（八世紀末～九世紀前半頃）

更埴条里遺跡（後背湿地）から屋代遺跡群南端の①区で、後の条里畦畔と同位置・同方向の溝が作られはじめる。また、古墳時代に水田域であった地区のうち、更埴条里遺跡K地区以北の水路隣接地に集落が点々と進出するようになる。第四の画期である。

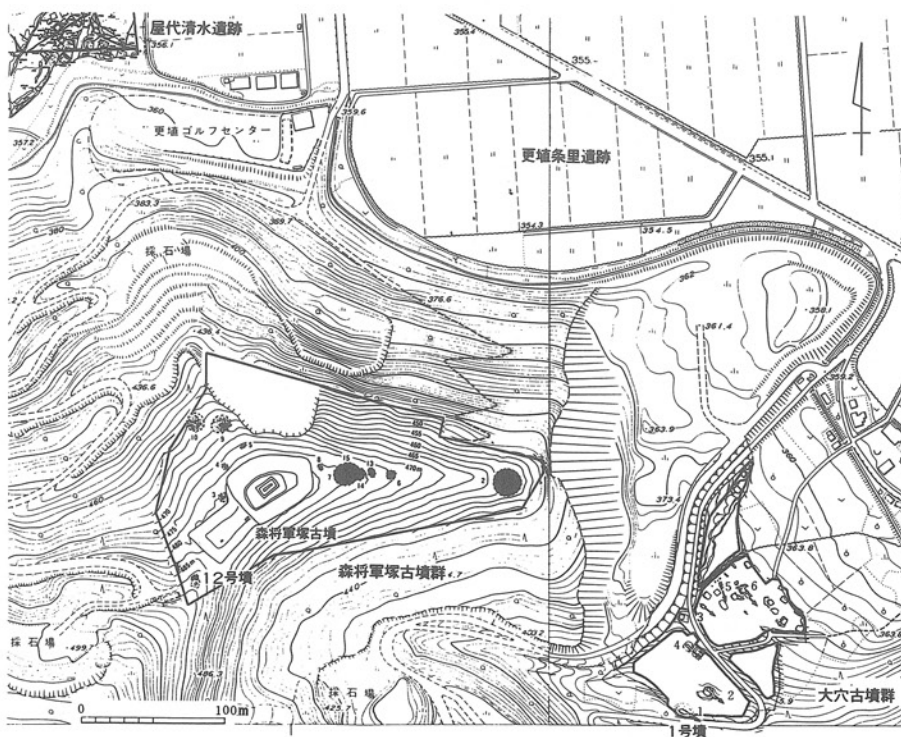
（5）条里型地割りの完成と集落再編（九世紀後半）

堅穴住居が埋められ、その上に坪境の畦畔が設置されるなど、低地に進出していた集落は解体させられる。更埴条里・屋代遺跡群の大半が条里型地割りに則った水田・畠となる。第五の画期である。

ただし、条里型地割りの完成後まもなく、大洪水により全域が厚い砂に覆われてしまう⁽⁶⁾。

（6）七世紀後半の位置づけ

古代、本地域においては、生産域（水田）と集落を含めた景観が大きく変化した画期が幾度かある。その中であって、七世紀後半は集落が拡大したり、移動する時期にはあたっていない。また、大規模な水田開発も現状では認められない。しかし、木簡出土地点に近い伝統的な集落内には大型掘立柱建物などが建てられるようになり、社会の変動が始まっていることを示している。



第6図 森將軍塚古墳群と大穴古墳群

水 辺 の 祭 祀					
	湧 水 開 掘		祭 祀 具 中 産 出		
	湧 水 型		祭 祀 具 中 産 出		
	遺 跡	遺 物	遺 跡	遺 物	その他
古墳中期 (5C代)	SD7068 SX7038	刀形 須恵器			
第5水田用 (7C後半) 古段階	SX7035	銅部穿孔 土部 管玉 白玉	SD8032 (SX7086) SD7062 (SX7037)	土占骨 石製鏡遺品 歌骨 石製鏡遺品	子持勾玉 骨、人形 鹿串、馬形 ヘビ紐木製品
新段階	SD7049 SD7042	鹿串 刀形 玉類		鹿串 鹿串+馬形 鹿串+ヘビ紐木製品	白玉 鹿串、人形 馬形、鳥形 ヘビ紐木製品
第4水田用 (8C初頃 前後)	SD7038	舟形 埴輪 人形	SD7035	石製鏡遺品 鹿串 鹿串+人形 鹿串+馬形 鹿串+人形+馬形 鹿串+人形+馬形+鳥形 鹿串+ヘビ紐木製品	鹿串、人形 馬形、鳥形 ヘビ紐木製品
第3水田用 (8C前半)			SD7030	出土量最大	鹿串、人形 馬形、刀形 鳥形 ヘビ紐木製品

第7図 屋代遺跡群「水辺の祭祀」変遷模式図
(1996宮島・寺内より)

四 古墳・祭祀施設の変化と継続

次に、埋葬関連遺跡に祭祀関連遺跡の動向を加え、在地の人々の世界観を揺るがしたと予想される変化を捉えておきたい。

(1) 森將軍塚古墳群と大穴古墳群 (第6図)

森將軍塚古墳群は、屋代地区を一望できる山地上に築造された森將軍塚古墳を盟主とする、伝統的な墓域である。ここでの古墳築造

が七世紀後半(12号墳)に終焉を迎える。

一方、古墳時代後期には、森將軍塚古墳群直下の谷に大穴1号墳が築造される(長野県埋蔵文化財センター一九九六)。時期的に並行する森將軍塚古墳群の被葬者との関係については不明である。谷地での古墳築造は、この後、八世紀代まで継続する。

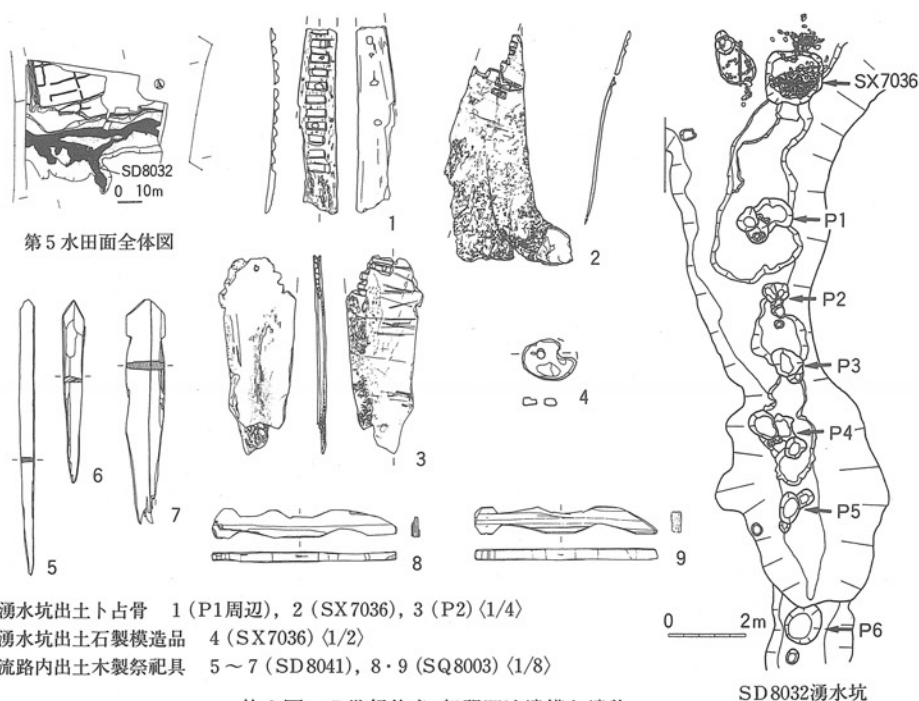
(2) 屋代遺跡群「水辺の祭祀場」の変化と継続性

屋代遺跡群⑥区で検出された祭祀遺構には、五世紀代から八世紀初頭まで継続して設置される「導水型」祭祀施設と、七世紀後半から見られ八世紀前半まで続く「湧水坑型」の祭祀施設がある。また、木製祭祀具の集中廃棄地点が七世紀後半から見られ、九世紀まで続いている(第7・8図)(宮島・寺内一九九六)。

狭い発掘区内に限っての所見ではあるが、七世紀後半は新たな祭祀が屋代の地に持ち込まれた時期にあたっている。ただし、ヘビ形などの特殊な形代が存在し、人形・馬形は独自の型式変化を示している。このことは、必ずしも中央の祭祀形態が、そのままの形で導入されたのではないことを示していよう。

(3) 七世紀後半の位置づけ

森將軍塚古墳群内での古墳築造の終焉、隣接する谷地での大穴古墳群形成といった変化は、政治的側面とともに精神(宗教)的に見ても象徴的なことであつたと考えられる。さらに、新たな水辺での祭祀の導入、さらにはやや遅れて屋代寺(雨宮廃寺)建立?など、七



第8図 7世紀後半 祭祀関連遺構と遺物

世紀後半における祭祀・宗教面での変化は著しい。

ただし、八世紀代まで古墳を築造している点、古墳時代以来の「導水型」祭祀を継続している点、特異な形態を持つ木製祭祀具の存在など、在地の独自の面も数多く認められる。

このことは、七世紀後半には、祭祀や埋葬の面で中央の影響を受けながらも、画一的な整備には至っていないことを示しているよう。

まとめ

以上、考古資料から七世紀後半の信濃と屋代遺跡群周辺の状況を概観してみた。

屋代地区では、七世紀後半に大型の建物群が集落内に建てられ、新しい祭祀が導入される。さらに、伝統的墓域においては古墳の築造が終焉するなど、政治・社会・宗教面での変化が著しい。しかし、集落・水田域の拡大には結びついておらず、伝統的集落周辺での生産力向上には至っていなかった段階、と捉えることができよう。

また、古墳時代から続く祭祀や独自の祭祀具のあり方からは、中央の影響を強く受けて社会の変動がはじまっていたながらも、画一的な整備には至っていない段階であったことがうかがえる。

木簡、木製祭祀具、在地産須恵器などの遺物は、むしろ七世紀末～八世紀初頭、さらに八世紀前半に質・量ともに画期を迎えること

になる。また、官衙的な様相を強めて行くこととなる。

この時期までを含めると、木簡に記された「布」生産に必要な麻糸、製錬炉（鉄生産）⁽⁷⁾ 関係遺物、あるいは在地産の須恵器、等々の供給源として、屋代地区周辺の扇状地や山間部の開発が注目される。しかし、現状では調査が行き届いておらず不明な点が多い。

水田などの大規模開発は九世紀を待たなくてはならない。

最後に、更埴条里遺跡・屋代遺跡群の整理作業は現在も進行中であり、報告書の刊行までに内容の微調整や改訂があり得ることをご了承願いたい。

今回の報告は、整理にあたっている市川桂子、河西克造、鳥羽英継、平出潤一郎、水沢教子、宮島義和らの成果を寺内がまとめたものである。また、木簡学会々員諸氏や多くの考古学関係者からご教示をいただいた。この場を借りて謝意を表したい。

註

- (1) その後、数点増加している。前回報告分の釈文の改訂とともに、一九九九年度、報告の予定である。
- (2) 七世紀第三四半期と七世紀末（八世紀初頭を含む）では、異なる面が多々見られるが、現在、整理途中のため区分し切れていない部分がある。そのため、第三四半期を中心にはいるが、七世紀末の状況を含む場合もある。
- (3) 宇野隆夫氏の研究などを参考とした。

(4) 渡辺博人氏のご教示による。また、現在、長野県内の窯址と屋代遺跡群出土須恵器の胎土分析などにより、産地推定を進めている。

(5) 一九九八年度、信濃国分寺資料館市民講座の大沢哲氏の発表資料。

(6) 遺構の重複関係や出土土器の年代観から、条里型地の割り完成したのは、九世紀後半のごく新しい段階と見られる。大規模な洪水砂が仁和四年(八八八年)『扶桑略記』ほか)に比定されるとすると、条里型地割り完成後まもなく壊滅的な打撃を受けたことになる。

(7) 製鉄に関わる製錬滓(穴沢義功氏のご教示による)が七世紀末―八世紀前半に比定される住居内から出土しており、近接地で製鉄が行われていた可能性がある。

【引用・参考文献】

宇野隆夫 一九九一 『律令社会の考古学的研究』

小平和夫 一九九〇 「第4章 第1節 古代の集落」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4―松本市内その1―総論編』

小林秀夫 一九九六 「最新の発掘調査成果―屋代遺跡群・大穴古墳群―」『最新学説』シノノクニから科野・信濃国へ

坂井秀弥 一九八八 「律令期の須恵器系譜―越後西南部における二つの系譜をめぐって―」『歴史と考古学』

竹原 学 一九九一 「第2章 第3節 歴史的環境」『石附窯址群Ⅲ』

鶴田典昭・中島英子 一九九七 「第9章 第3節 高丘丘陵古窯址群の須恵器生産について」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13―小布施町内・中野市内その1、その2―清水山窯跡ほか』

寺内隆夫 一九九六 「長野・屋代遺跡群」『木簡研究』第一八号

長野県埋蔵文化財センター 一九九七 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22―更埴市内その1―清水製鉄遺跡・大穴遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 一九九八 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25―更埴市内その4―更埴条里遺跡・屋代遺跡群―弥生・古墳時代編―」

長野県埋蔵文化財センター 一九九六 「長野県屋代遺跡群出土木簡」

原 明芳 一九九六 「信濃における奈良・平安時代の集落展開―松本平東南部、田川流域を中心として―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第七集

宮島義和・寺内隆夫 一九九六 「屋代遺跡群」『シンポジウム水辺の祭祀』日本考古学協会

森嶋 稔 一九九四 「更埴市史」第一巻

山田真一 一九九六 「窯業生産と古代の土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第七集